

---

# 鹿肉料理

ぼーず平野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鹿肉料理

### 【コード】

N0260Q

### 【作者名】

ぼーず平野

### 【あらすじ】

鹿肉の創作料理を出す店があるというので、甘木君と行ってみたが……。日常の狭間に起きる不思議な体験を綴る。

麵麩（パン）のあいだに鹿の天火焼きをはさみ、カレー汁を添えてたべさせる料理屋があるというから、正月さつそく甘木君を連れていってみた。

当日はちょうど昼間から新年の会合があり、その席で思いがけずシヤムパンを続けざまに飲まされたので、甘木君との約束の三時にはもう酔っぱらっていた。あやうく待ち合わせ場所を過ぎてしまいいそじになったところが、会合のあつた部屋に襟巻きを忘れてきたことに気づいて取りに帰ろうと降りた場所が約束の駅だった。

電車を降りた途端にここが待ち合わせ場所だと気づいて、襟巻きを取りに戻るかどうかを煩悶しているうちに、どうやら三時に近くなったのでもう取りに帰らないことにした。そのかわりに会場に電話をして調べてもらった。すると電話口の人が何度も代わったり同じことを聞きなおしたりして、そのたびに随分待たせるので、癪癪をおこしてもう探していらないと電話を切った。

そして改札を出ておいてから、待合室の売店で暖かい茶を買ってのんだり広告の看板をながめたりしていたが、肝心の甘木君は来ない。外は小雪もちらつきはじめていて、だいいち襟巻きがないから、人が出入りするたびに首周りに北風が吹き込んで大変寒い。

私は生来せっかちなほうで、道を歩くにも前をいく連中をみな蹴飛ばしてやりたいくらいな性分だが、殊に他人との待ち合わせには、自分は約束よりも十分も十五分も前に行つて待つている。だからといって他人がみな自分に倣って早くくる訳ではないが、当方の勝手で、約束の時間を一分でも遅れられると大変気になる。

だから自分の時計を見たり待合室の大時計を見たり、大時計と自分の時計が合っているか確かめたり、右を見たり左から来るかと思つたり、大いに心配で落ち着かない。

すると甘木君は十分も遅れてやってきて、大きな声で先生どうも

旧年中はと云うから見ると、顔が朱泥で塗り固めたみたいに腫れている。両の手には紙袋をいっぱいぶらさげて、みんな中から紅白の水引が覗いているようでもある。

「なんだもう酔ってるのか」と云うと、甘木君はえへへと笑って、いやなにほんの少しですよと荷物を持ったなりの手で顔をさすった。「やはり判りますか」

「酔うのは一向構わんけれど、今からご馳走をたべるのだから、その楽しみを阻害するようでは困る」と私は苦情を云った。そのくせに私自身はシャムパンで怪しくなっているのだから、甘木君にとつては理不尽な話である。

待合室をでて歩きはじめるとやはり随分と寒い。手がかじかむからオーヴァの中に入れて歩いてしていると、甘木君はいい気持ちですなアなどと云っている。

「風の具合がこう、頬にあたつて丁度良いじゃありませんか」と云う。

彼は何を飲んできたのか、おそらく熱いところをお銚子で何本もやったに違いない。私はシャムパンであるから、どうもドブドブと胃がいつまでも冷たくて弱っている。

「君、鹿肉は大丈夫かね」と私は歩きながら甘木君に尋ねてみた。電話で話したときには、彼の声が遠くて頼りないうえに、うしろで随分と騒がしいようであったから少し不安に感じていた。

「大丈夫なものも、食ったことがないので今日は大変楽しみにしているのです」と甘木君は云つてこつちを見た。

彼は馬肉なら何度かたべたことがあるそうだ。臭いと聞いたが、まったくそんなこともなく大変美味であった。だから鹿肉も同じように旨いはずだと云う。その理論の飛躍はあまり理解できないが、私も馬肉は好きである。特に馬刺しは牛刺しよりもあつさりしているようで、いくらでも箸が伸びる。しかし鹿肉に関しては、私も今回がはじめてである。聞く話によると、やや癖があると云う人もいるし全く旨いと手放して褒める人もいる。誰に聞いても褒めるのは

燻製である。燻製になるともう大丈夫ですと云う。煙の匂いが勝っているので、肉の臭みは判らないのだと云う。それだけを聞くと、そこまで無理をして食べるべき肉でもないような気もする。

「しかし麵麩と鹿肉の天火焼きとカレー汁ですか。上手い取り合わせを考えましたね」と甘木君もしきりに感心するので、私は今日彼を連れてきたことを嬉しく思った。

五六分歩いて青銅色の看板をさげた家に入っていくと、意外なことに人で混雑している。大変忙しそうに行ったりきたりしているボイを呼びとめて口を開こうとすると、

「お生憎様で。席をご予約でなければ、二十分ほどお待ち願わなければなりません」と云う。

私はまさか正月からこんなに混雑しているとは思わず、席の予約もしていなかった。二十分と聞いて気が遠くなりかかったが、甘木君が横からせつかくですから待ちましようと言うから、そのつもりでボイに伝えようとすると、もうどこかへ去ってしまった後である。

それから流れてくる肉料理の旨そうな匂いに我慢を重ねつつ待っている、二十分経っても誰も呼びにこない。こちらは店の入り口にぼんやりと立ったまま待っている、椅子もないから大変疲れる。甘木君もさっきの朱泥のような腫れがおおかた引いてきて、随分と平気な目をキョロキョロさせてときどき欠伸（あくび）を囓んでいる。入り口に荷物を持った大きな男が二人も立っていたらさぞかし店にとつて迷惑なことだろうが、食い終わった客を早く追いだせば店側の迷惑も解消される訳であるから、吾々が悪いということではまったくくない。

すると三十分ほど経って、もういい加減しびれの切れてきたころにさっきのボイがやってきて、本日は新年のお祝いで食事をゆっくりと楽しまれるお客様が多ございますので生憎とお時間がかかっております、つきましてはお料理のご注文がお決まりでしたら先に伺いますと云う。

「時間がかかるとは、あとどれくらいかかるんだね」

「お客様の食事の済まされるまででございます」

「そんなことは判っているが、それがいつかと聞くんだ」

「ハア、それは当方には」

無理な話だと判っているながら、さつきから散々待たされて気が立っているから乱暴な口が出る。

「判らないならいい。では料理の注文を云えばいいのか」

「さよう」

「なんとか云って料理の名前は知らないが、麵麩のあいだに鹿肉の天火焼きを挟んでカレーソースで食べさせるものがあつたらう」

「ローストビーフ・サンドウィッチでございますか」

「違う違う、鹿肉だ」と私は話を通じないのでまた腹を立てた。

横から甘木君も鹿だ鹿肉だと云う。

「鹿肉でございますか」とボイは首を傾げる。

その傾げようが激しいので、私は侮辱を受けた気がして顔が燃えるようであった。

「なぜ知らないのだ。年末にちゃんと色刷り広告で出ていた」

「それは」

「売切れなのかい」

「いえ、さようなものは一寸」

「一寸なんだい」

「ええその、当店では扱っておりませんが」

「なんのことだ」

「そのようなお料理はございませんので」

「なにを云う、そんなことがあるものか。ちゃんと広告で見たからこうして来ているのだ。いい加減なことを云うんじゃない」

「しかしお客様」

ボイは私の横に突つ立つたまま、甚だ扱にくそうに眉を寄せている。

「さも名物料理のように宣伝して客を呼んでおいて、そんな料理はないという法があるものか。これは客寄せのための、一種の詐欺で

ある」

そう云って不都合をなじったところ、ボイは店の奥に引っこんだ。しばらくすると料理屋のあるじが出てきて、手前ではそのような料理をお出したことがございませんが、どこでお聞きになったのですと、たいへん懇慫ではあるがさも人を軽蔑したような顔で見た。「どこか他様とお間違えでは」

あるじの顔はどこかで見たことがあると思っていると、いろいろな雑誌に書かれている高名な料理人らしい。そうと判るとなおさらのこと、馬鹿にされているようで癪に障った。

「云うに事欠いてなんだ、一見（いちげん）客だと思って。そんな無礼な云いようがあるか」

私は腹が煮えくり返ってひっきりなしに溜飲があがるようで、云いたいことの半分も云えずにいると、甘木君が見かねてもういいじやありませんか、ねえ、出ましよう、きつと何かの間違いですと云って外へ引っぱりだした。

家に帰ってもぶんぶん怒っていていつまでも収まらない。ついに口で云えなかつた苦情を文書にして店に送りつけようと考えた。そのつもりで先日の広告を乱暴な手で探していたら、家族が不思議がって、お父さん何をそんなに立腹ですかと問うから、これこれだと事情を説明すると大変呆れて、つい先月そんな料理の広告を夢に見たと仰っていたではありませんかと云う。そういう料理が家でできないかと仰るので、素人では鹿肉が手にはいりませんと云ったら、しきりに残念がっておられたではありませんかと説明する。

それを聞いて、たちまち謎が氷解するように記憶が甦ってきた。

実在の店から新案料理の広告が出た夢を家人に語っておいて、夢で見たその料理が大変旨そうだったから家で作れないのかと云った覚えが、たしかにある。私が食わせると勢い込んで騒いで、店主にまで苦情を云った料理は、単に私が夢の中で捏造したものの話しであつたようだ。店主やボイはあずかり知らず、独りで話を製造して独りで立腹している私に付き合わされた甘木君にとつても迷惑千万

な話である。

私は家族の前で大いに赤面して、到底それを甘木君に打ち明ける勇氣はなかった。だからいまだに会うと甘木君は、あのときの話は不思議ですなア面妖ですなアと繰り返している。私はもう居たたまわなくなつて汗をかくほどで、彼が早くその話題をやめてくれないかと思うことしきりである。

その後、用事があつて近所を通つても、あの青銅色の看板をさげた料理屋には寄りつかない。なんだかいつでも窓から店主がこちらを睨んでいるような気がして、通行するたびに大変気が塞ぐのでしばらくは閉口した。

ところが一昨日、古い文芸誌を処分するために廊下に出しておいたところ、家の者が雑誌のあいだからくだんの料理広告を見つけ出して騒いだ。奪い取つて眺めるに、たしかに見た記憶がある。麺麭（パン）のあいだに鹿の天火焼きをさみ、カレー汁を添えてたべさせる旨のことが書いてある。店の名前もあの青銅色の看板をさげた家に相違ない。値段もはっきりと書いてあつて、大変お値打ちですという注釈の文字一つひとつに、黒々と点まで打つてある念の入れようである。

広告を眺めているうちに、私は手が震えはじめて止まらなくなつた。家の者に何度聞いてみても、私が夢で見たと語つたことに間違ひはないらしい。店の主も私のことを、偉大なる間抜けを取り扱うような目つきで見ている。甘木君は相変わらず不思議ですなアを繰り返している。しかるに広告はこのとおり存在している。なにがなんだか得体が知れない。五臓六腑が転動したようになって、ついに私は寝込んでしまった。

<了>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0260q/>

---

鹿肉料理

2011年1月17日23時40分発行